累計2000種紹介目指す

「白神山地の蛾250」５冊目刊行

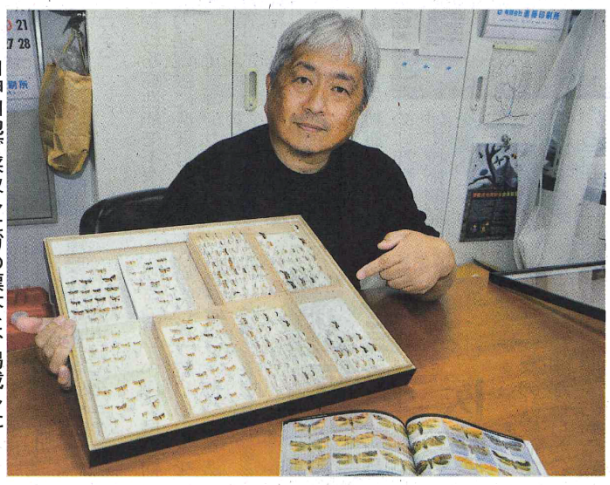
3年がかり、小型種多く

弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター（センター長・中村剛之教授）が、ブックレット

弘大研究センター

シリーズ「白神山地の蛾250」の5冊目を3年がかりで刊行した。2018年から白神山地で始めた調査を通し、紹介したガは累計1250種。本州北部に生息しないとされるガを確認したり、専門家でも種名を特定できないガを採取するなど、環境変動や生物多様性をうかがわせる貴重なデータを蓄積してきた。中村教授は「累計2000種を目指して調査を続けたい」と意気込む。

（下山和枝）



白神山地で採取したガの標本と、掲載したブックレット（右下）を示す中村教授

同センターは18年から、学生や地域の昆虫愛好家の協力を得て調査。20年に初めてブックレットシリーズを刊行し、種名を特定する同定が済んだ250種を和名や学名、標本写真と採取地などを記して紹介。23年まで毎年1冊ずつ新たに250種を紹介する形で刊行したが、今年刊行の5冊目は3年がかりとなった。

今回のブックレットでは、羽を広げた大きさ（開張）が1～2㌢程度という小型のガを多く紹介。中村教授は「初期は大型で目立つガなど、同定や採取が割と容易だったガを紹介していたが、今回は小型で判別や採取が難しいガの調査などに時間を要した」と振り返る。

実はガは本来の専門分野ではないという中村教授。白神山地で採取されたガには、専門家の意見を仰いでも同定し切れないものもあり、「白神山地の奥深さを感じる」と話す。

一方で、開張約12㌢のシモフリスズメのような大型のガも新たに採取し紹介。中村教授は「生体を10年以上前に弘前市内で確認しており、生息は知っていたが採取まで時間がかかった。時期や時間、場所など複数の要素があり、採取は容易ではない」と笑う。

18年から調査を継続する中で、地球温暖化による環境変動の影響を感じるという中村教授。「台湾やフィリピン、沖縄といった南の地域に生息するとされてきたガが白神山地でも採取された」という。ガは飛翔能力が高いため、採取と分布域の拡大は別だが「南に生息するガが北に動いていることは事実」と指摘。調査では北海道にのみ生息するガが本州へと分布を広げる動きの有無も注意しているが、「北のガが南へ動いている様子はこれまで確認できていない」とする。

調査は長く継続して記録することでデータが蓄積され、大きな情報になっていくことを実感しているという中村教授。白神山地のガについては「さらに累計2000種の紹介を目指し、できれば8冊まで刊行したい」と意欲を示した。

同センターでは希望者にブックレットを無料で配布する。希望者は同センター（☎0172㊴3707、Eメールdhalma@hirosaki-u.ac.jp）へ。

この画像は，当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。